

六 花

り
つ
か

月刊俳句雑誌

2007 15th anniversary

Rikka haikukai rockoh yamada

cover designed by masumi

4月号

貫

山田六甲

飛び込んで飛蝗ぼったの滑る捨て茶碗
流木の湿りに秋の夕日かな
秋暮れて船は灯あかしとなりけり
秋灯をさへぎり船の進むなり
水差しに水なみなみと十三夜
湯船より脚はみ出せる十三夜
木枯けやきの櫂ほおを渡りけり
京劇の如くに降れる木の葉かな
池普ぶし請しんあとに一枚渡し板
揉み合うてをるかに骸むくろ秋の蜂
秋の蜂腰曲げて人刺さむとす
頬紅を濃く刷きて出る初稽古

以上、角川「俳句」二月号から

耕せる男の肩に鳥の糞まり
春霞紙工場のにほひ来る
夏みかん南国土佐へ岐わかれ道
荷車の落して行けり春野菜
鶏糞の臭ふ春田を打ちにけり
燧ひうち灘なだ祓はらうてゆけり春の鳶
白梅や猫がくさめをして通る
梅一輪母に小遣もらひけり
吸すい呑のの机に梅の花こぼる
秤はかりから少しこぼれし釘煮かな
雛檀を伺ふ猫を叱りおく
ぼんぼりに焦げ跡のあり雛祭
投げし餌を引つ張り合へる春の鴨
黒猫がつついてをりぬ落椿

春^{しゅん}昼^{ちゆう}になまめかしかり^{かん}鉤^な屑^{くず}
落^{らく}椿^{ちん}拾^{しつ}ひ上^{じやう}ぐるや崩^{くずれ}れ落^{らく}つ
横^{よこ}たふる身^みにしめり来^きる春^{しゅん}の土^{つち}
沈^{しん}黙^{もく}に取り^と囲^いまるる女^{にょ}雛^{ひな}の首^{くび}
朧^{おぼろ}月^{つき}舐^なめらば溶^とけるかもしれぬ
花^{はな}筵^{むしろ}残^{のこ}されぬたる朝^{あした}かな
羊^{よう}羹^{かん}のやうな空^{そら}なり春^{しゅん}の星^{ほし}
朧^{おぼろ}かな抱^{かか}き合^あふたびに零^{ゼロ}になる
光^{ひかり}りつつ陰^{かげ}りつつ花^{はな}散^ちりにけり
枝^{えだ}振^ふりのせせらぎに似^にて若^わ楓^{ふう}

節分の寿司いきほひで巻き上げし 水谷ひで江

雪晴や昨夜の小火の匂ひたる

傘の雪払へば屋号大きかり

星座して宇治十帖を春炬燵

春足袋の履き替へ持ちて出かけけり

節分に巻寿司を恵方に向いて食べると縁起が良いとされるのは関西のお寿司屋さんのアイデア。
掲句は家庭で巻く寿司で商売のその手には乗らないぞという主婦の意地も見えてくる。威勢良く巻き上げた寿司には運が向いてきそうな氣迫がこもっている。
傘の句は「払へば」と俳句では嫌う原因結果のように見えるが、雪を払い落すことによつて屋号が大きくなったというのではないからこの句の場合因果関係の問題を云々するには当たらない。

猪年

貝森光洋

歳だけが一つ遺され年の暮
猪年のぶつかりながら明けにけり
吹雪ふぶかれて津軽の貌かおの刻まれる
吹雪ふぶかれても牛の尿線揺らぎなし
埋うづ火みびの目玉の覗く灰の中

歩道

梶浦玲良子

はいる場所なきてにをはや風花す
一月の墓碑め背中を撫なぜにゆく
素とりつぴんの冬とぼつたり橋の袖
取説とりせつにつまづいてゐる冬の蠅
手を挙げて歩道を渡るナマコかな

寒 卵

木内美保子

衣^{きぬ}擦^{ずれ}れの音かすかなる初^て点^{まえ}前
 茶^{ちや}の^{はな}花^やや^{きん}金^{いろ}色の^{くすり}薬^ふつ^ふつと
 枯^{かれ}葎^{むぐら}引^ひく^やや^ぱぱら^ぱら種^ここ^ぼぼる
 磯^{いそ}山^やや^い入^い日^がが^や焼^いいて^あ藪^ぼ樁
 掌^てに^のの^せて^{ほん}の^り温^し寒^卵

人の髪

笹村 政子

書^か初^{はじ}め^の墨^{すず}た^つぷ^りと^こ子^に磨^すり^ぬ
 人^{ひと}の^{かみ}髪^あ足^あして^は初^は髪^あ結^むひ^あげ^し
 箒^{ほう}目^めの^う消^えか^{かり}か^りあ^る恵^え方^{ほう}道^{みち}
 城^{しろ}跡^{あと}の^{ふる}古^ふ井^い冬^{ふゆ}日^ひを^す吸^ひ込^め込^め
 狛^{こま}犬^{いぬ}の^{みづ}水^ひ引^ひゆる^び女^め正^{ただ}月^{つき}

春の足袋

水谷ひさ江

傘の雪払へば屋号大きかり
雪晴や昨夜の小火ほやの匂ひたる
節分の寿司いきほひで巻き上げし
正座して宇治十帖を春炬こた燵たつ
春足袋の履き替へ持ちて出かけけり

池崎るり子百句

春一番鳴門の渦を押し上ぐる
初蝶のゆめのかけはし渡りけり
小鳥来る十六歳の誕生日
雛壇ひなだんの小さく見ゆる座敷かな
雛飾る左近さこんの桜褪あせにけり
雛納め雨で一日延びにけり
種床にしみ込んである春の雨
一つまみ塩入れて置くあさり貝
同じ事くり返し言ひ夏蜜柑
思索して飛べぬつばめを見るつばめ
照明のやさしく春の絵画展
免疫の低下ひたすら梅の花
いたはりの言葉さがして青き踏む

坪庭のくらしにゆとり春の土
たつぷりと恵みの雨や桃の花
春しゅん暁ぎょうの夢の行方をさぐりをり
啓けい蟄ちぢや午前三時のコマーシャル
指先の匂ひかすかに養よう花か天てん
葉桜や手鏡に髪切りぬたる
耳慣れぬ方言やさし春の蝶
短距離をバレンタインの日も走る
方針を換へし老舗や竹の秋
虎杖いんどうの捨てられぬたる歩道橋
恋猫の背すぢ伸ばして歩き出す
お隣の猫に好かれておぼろ月
目に見えて青田広がる風の道
あぜ豆を根こそぎ貰ふ日暮かな

蝙蝠かむぼりの飛び交ひて闇近づかず
クーラーの静かに夫つまのわが名呼ぶ
そらまめをふつくらと煮て供へけり
一匹の業ごうを背負へる蝸牛かたつむり
茅かや葺ぶきの小屋をぐるりと蓮の花
沢蟹を闇に放せしときに風
名物の塩味まんぢゆう風薫る
ほんものの葉に包まれて柏餅
須磨駅の長い階段海開き
水打ちし後の夕立やさしかり
ひまはりの八万本に入日かな
被災地へご巡幸あり雲の峰
でで虫の行き方知れず雨となる
今のいま見しかたつむり姿なし

毒くらげ足元ゆらぐ科学館
六十名傘寿の同期百合の花
母の日の母の好物供へけり
美濃焼にビールの泡のやさしかり
冷奴薬味を変へて昼の膳
薔薇園のベンチに二人憩ひけり
限りある身をいとほしみ薔薇仰ぐ
久しきを耐へて真赤なゼラニウム
沈丁花掃き寄せられし金平糖
花 芒 母 の 匂 ひ の 畳 紙
秋刀魚焼く煙の出ないガスコンロ
左手をこまめに使ひ秋桜
すんなりと受身の構へ酔芙蓉
新涼や舌に残れる加賀落雁

新涼や眠りを破る音のなく
木の実降る人の気配を感じをり
車道まで降り転げくる木の実かな
鱗雲くつきり遙か西の空
青春を捧げ悔ひなき終戦日
ひぐらしや風新しき雲と化し
後ろから人の声かな木の実落つ
六甲のおいしい水や野分あと
野良猫にあとつけらるる十三夜
髪染めぬまま過ぎにけり蕎麦の花
敬老日いつもの老舗の千鳥焼
新涼や急いで渡る青信号
メール来る時差七時間鳥渡る
団栗のこんなところにありにけり

七五三大屋根の鳩飛び立てり
何時迄も座つて居たし毛糸編
インク濃き句誌届きけり黄水仙
小春日の柱クレーンに吊られをり
ひとり立つホームの長く冬茜
背伸びしてねんねこの中のぞき込む
やはらかき皮の蜜柑を選びけり
冬かもめ群より上を行く一羽
小春日やたしかに動く花時計
正解のひとりもなくて青木の実
一年のほこりうつすら煤払
明るさや竹の絵柄の白障子
住所録新しくせり二月尽
本当はあなたと居たい冬の月
掃き寄せし後に残れる冬の草

六甲山人工雪の解けはじめ
短日やライト眩しき青信号
冬銀河修学旅行は石垣島
佳きことの指折りありぬ年忘れ
祝鯛並んで買ひぬ魚の棚
古希すぎて子等に貰ひしお年玉
ありがたや今年も無事に小豆粥
薄切りの千枚漬の重みかな
練習の成果上がれり謡初
蓮根の穴のとのひ年酒かな
美しき手書きの賀状給はりぬ
初鏡華やぐ目尻の皺の数
ふるさとの地鶏の味や小正月
初句会たるみの海の波静か
いつまでも更地のままに初景色

雪樹集

寒の月 池崎るり子

寒の月ビルの谷間をこうこうと
寒獅の大漁に人溢れけり
心ばへ良きふたりなり年男
大寒や就職内定通知あり
旗立てて初荷の車今昔

裸木 K O K I A

大根の首の太きを選びけり
良き土に育みにけり龍の玉
裸木の雨滴一滴づつ光る
おごそかに比良の暮雪の広ごれり
手袋の二歳ふたつの形に落ちてをり

ねこ 岩松 八重

霜柱猫のお通夜をしたる家
かの猫のまだ縄張りか冬の庭
寒の星袖触合つただけの猫
息白し猫の戒名きき流す
爪跡の障子隣の猫消えて

六花集

山田六甲選

延川 笙子

丈高き竹燃え猛るとんど力な

あの人 はきつと来るはずとんどかな

空焦がす焚火に浮かぶ君の顔

生焼けの餅持ち帰るとんどかな

左義長の灰を額に帰りけり

山本ミツ子

親子独楽つかずはなれず廻りけり

打ち減りし魚板の鳴ける虎落笛

遠吠を誘ふ寒夜の救急車

数へ日や花舗のせり出す駅通路

冬の星ぼろりと落ちて金平糖

金月 洋子

菜の花へ蝶のとけこみゆきにけり

囁りを目で追ひかけてをりにけり

藤の花分けては風のゆきにけり

ひとひらの花びら浮かぶ茶碗かな

光さす苔に落ちけり沙羅の花